

武井昭教授定年退職記念号発刊に寄せて

高崎経済大学経済学会理事 中野正裕

武井昭教授は、平成20年3月末日をもって、高崎経済大学経済学部を定年になり、ご退職をむかえます。教授の長年のご功績、ご貢献に対し、ここに感謝の意を表する次第です。

武井教授は、昭和42年4月に早稲田大学大学院経済学研究科を修了され、昭和44年4月、経済学部助手として高崎経済大学に就任されました。昭和47年4月より経済学部経済学科専任講師、昭和50年4月より助教授、昭和59年4月より教授として、39年の長きにわたり本学経済学部奉職され、研究教育に携わる大学人としてご活躍されました。また、平成14年4月から大学院経済・経営研究科修士課程、平成16年4月から同博士後期課程教授を兼任されました。経済・経営研究科が設立されて6年が経ちますが、修士課程、博士後期課程いずれの開設および運営においても、武井教授は常に中心的役割を果たしておられました。今日にいたる経済・経営研究科の発展は、ひとえに武井教授のご尽力と並々ならぬご配慮の賜物であるといっても過言ではありません。

武井教授はまた、本学附属産業研究所長を2度（平成8年～10年、平成14年～16年）にわたり務められたほか、2007年に学生部長代行を務めるなど、様々な形で本学ならびに本学会の発展のため、尽力されました。武井教授は学外においても、群馬県、高崎市などの各種委員会委員、群馬県中小企業団体中央会、群馬経済局、群馬労働局などの各種委員会委員、専門委員を務められたほか、日本文化会議、日本モンゴル協会、群馬政策科学研究機構など、多岐にわたる社会活動を精力的に行われ、多大なご貢献をなされました。昨今、産学官連携などを含めて大学の社会貢献、責務が厳しく問われておりますが、その遙かな以前から、武井教授はわれわれ大学人が対外的に様々な社会的責務を果たすべく、大いなる求心力として努めてこられました。

武井教授のご研究について、とりわけ著作活動のご足跡は、質、量ともに圧倒されるばかりです。著書40冊（うち単著が6冊、共編著5冊、共著28冊、翻訳が2冊）、論文も社会経済学関係で49本、社会保障論関係で17本、中小企業論関係で31本、仏教経済関係で47本、その他、報告書、時評、書評など合わせると、ゆうに200本を超えるものです。本学会も、また附属産業研究所におい

ても、学会誌ならびに紀要に膨大な量の寄稿を戴いており、本学ならびに本学会の発展が武井教授のご功績にどれだけ支えられてきたか、多言を要しないでしょう。

武井教授の研究領域は社会経済学にはじまり、社会保障論、中小企業論、仏教経済など多岐にわたっており、一言で表すことは到底できないものです。誤解を承知で、敢えて申し述べれば、武井教授の「現代の社会経済システム」論は、いわば反科学的に「社会」の姿を鋭く観察し続けることで、純粹経済学や経済体制論の枠にとどまることなく、経済社会の動態について独自の解釈を見出そうとするものではないかと思われます。そのひとつの方向性は、ちょうど10年前の1998年に著された「経済と経営のシステムの関係」（附属産業研究所編『新経営・経済時代への多面的対応』日本経済評論社、第2章に所収）に見出すことができます。武井教授はその中で、インターネット化に代表される「情報革命」が従来の社会経済構造を変容させ、また「情報」と「サービス」が価値体系の中心にシフトし、新たな経営経済社会を形成しつつあることに言及されています。そして、イギリスに発する「国民経済学」、その後の「市場経済学」やアメリカ経営学、ドイツの経営経済学のいずれも、現代の社会システムの変容を解明するにはもはや限界があり、したがって新しい経営経済学の学問体系を構築することの必要性を強調されています。われわれ経済学徒の多くが拠り所とする現代の主流経済学では、他の近代科学と同様、時間・空間にとらわれず最も抽象化された社会観が判断基準として重んじられ、そうした判断基準に馴染まない類の個別的課題の解明は「後回し」にされる傾向があります。武井教授はこのような近代社会科学の姿勢に疑問を呈し、社会の動態を余すところなく具に観察することで、あらためて「現代」とは、そして「経済」とは何かを一貫して問い、独自の社会経済システム論を構築して来られたのだと思います。

武井教授のこうした研究における独自性は、教授の人間味あふれる人柄と相まって、多くの学生を魅了してきました。毎年、経済学部ゼミ選考の時期には、武井ゼミの門をくぐろうと熱心な学生が押しかける光景が見られました。また武井教授の周囲には、いつも教授を慕う門下生の姿が数多く見られ、しばしば羨ましく感じることもありました。とりわけ教授の留学生に対する愛情と厳しさあふれるご指導には定評があり、研究生を志望する多くの留学生が、他県から本学に殺到するほどでした。

このように、本学ならびに本学会のこれまでの発展は、武井教授の教育、研究ならびに社会活動全般におけるご貢献の賜物であり、後に続くわれわれは責

務の大きさに身の縮む想いがあります。武井教授がご退職後も、学術研究においてよりいっそうの厳しい観察眼をもった、変容する社会システムのいわば番人として、より高次の社会経済システム論を展開されていくことは疑いようもありません。

なお、武井教授には、特任教授として、ひき続き本学における教育、研究に参加いただくことになっております。繰り返しになりますが、今日までの長きにわたるご指導、ご鞭撻に心から感謝申し上げますとともに、今後ともわれわれの大きな指針となって頂けます事を強く念願するものです。最後に、武井教授の今後ますますの発展とご健勝を心より祈念して、擱筆させていただきます。